

草れづれつ和令

外交評論家・元外交官

金子熊夫

kaneko@eeecom.org



前回(2月8日)の続きですが、私が、外務省傘下の日本国際問題研究所の所長(代行)をしていた1980年代半ばの思い出の中で、もう一つ、どうしても忘れられない出来事があります。

若い中国人研究者の不審死

かねてから日中の学者、研究者や若い外交官同士の交流促進を重視していた私は、上海の国際問題研究所を訪問した折、そこで若い優秀な日本研究者S君を見つけ、日本に特別研究員として招聘(しようへい)しま

した。日本語は完璧に近く、しかもハンサム、今流に言えばイケメンで、研究所の女性職員たちにも人気がありました。S君を教師にして中国語会話クラブを開き、私も参加しました。時々拙宅にも呼んで、家族ぐるみで付き合っていました。川崎市の多摩川沿いの彼の自宅アパートに招待されたときは、新婚早々の美

好意的計らいで、中国国内を自由に旅行し取材できたということです。当時北京で大使をしていた故中江要介氏(私の本舎条約局と旧南ベトナム日本大使館で直屬の上司として仕えた大先輩)から直接聞いたことですが、山崎豊子自身も、「大地の子」のあとがきでそのことをはっきり書いています。特に印象的なのは、「中国を美しく書かなくて結構、中国の欠点も暗い影も書いてよろしい、それが真実であるならば、真実の中日友好にならば」と励まされたというところで、絵書記の人間的魅力と懐の深さが如実に感じられるエピソードです。

中国とどう付き合っていくべきか

体験的対中外交論(その2)

人の奥さんの料理をこ馳走になったこともありますが、やはりそうなのだと思いますが、

思 い 出

日中蜜月時代の

も旺盛で、将来必ず日中友好に役立つ有為な人材だと期待していました。ところが、来日して2、3年経ったある日突然交通事故でS君が亡くなったとの知らせを受けました。ちょうど私は海外出張で東京にいなかったの

1972年の国交正常化以後で、日中関係がベストの時代だったと思えます。建国第一世代の毛沢東、周恩来が相次いで死去(1976年)し、文化大革命もようやく終息。代わって復権した実力者・鄧小平が、改革開

放政策を打ち出し、開明的な胡耀邦が中国共産党の総書記、趙紫陽が首相に就任。さらに、日中平和友好条約調印(1978年)で日中関係は一気に蜜月時代を迎えました。

(2面に続く)